

[連載]

ヘンツェ:オペラ
【ルプパ】

ヤツガシラと息子の愛の勝利

3



音楽と夢と現実 ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ

ジェンス・ブロックマイヤー JENS BROCKMEIER

訳・三宅陽子

ジェンス・ブロックマイヤー

ドイツのベルリン自由大学、カナダのウニベグ大学で教鞭をとる。著書には、哲学や言語心理学、音楽と芸術を取り上げたものが多い。編集者としては、『ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ、音楽と政治: 作品集』があり、ヘンツェとその音楽に関する広範囲な執筆や講演を行っている。さらに、ヘンツェがけた『音楽的美における新しい視点 (1979-1999)』全集の編集に協力し、そのすべての巻に寄稿している。

ハンス・ヴェルナー・ヘンツェが住むローマ近郊の小さな町、マリノを訪れるには電車を利用するのが一番いいだろう。それも夏に限る。街の混雑が最高潮に達し、一年中で最も暑くて最も喧騒に満ち、そして最もゴミゴミとしている季節に、あの巨大なローマ中央駅を出発するのだ。旧式の郊外電車は、すべての窓が開け放たれ、風にカーテンがはためいている。電車がローマ周辺部の住宅密集地域を通過する時に目に入る黄土色、茶色、赤色をした大きな家屋は、20世紀初頭に建造されて以来一度でもほこりを払われたことがあるのだろうかと思ってしまう。それでも、太陽の日差しの中で家々は輝いている。やがて、田舎風景の断片がちらほらと見え始める。茶色の原っぱ、四六時中水撒きされている野菜農園や庭園などだ。そのうち糸杉や高野槇の数が少しずつ増えてくる。そして、ついには起伏のある地平線が見えてくる。アルバーノ山地の丘陵地帯に入ると、うだるような暑さから開放されてホッと一息つく。あるいは、そんな気がするだけなのかもしれないが。

実は、アルバーノ山地はなだらかな丘にすぎない。それでも、古代ローマの時代から、この丘陵地帯は大都市の暑さと混沌を逃れて涼を求めに来る避暑地となってきた。かつて何世紀もの間ヨーロッパでは都市とは世界を意味していた。今日でも、ローマ教皇は毎年アルバーノ丘陵地帯にある夏の離宮で静養される。ハンス・ヴェルナー・ヘンツェは、過去半世紀の大半、そこからそう離れていない場所に居を構えているのだが、家の敷地の周りにはかつてギリシャ人がアルテミスと称していた女神ディアナがこの地を統治していたと言われる時代に建造されたカステリ・ロマーニ(ローマの城)が数多く点在している。ヘンツェの音楽の多くが、開放感あふれる田園地帯に地元のイタリアン・スタイルでゆったりと建てられた静謐な自宅で生み出されてきた。ヘンツェ邸には草木の生い茂った庭園があり、それに続くオリーブ園とぶどう畑ではその住人と訪れる客人すべてに供されるに十分な量のワインとオリーブが収穫される。庭園の下に中世の広大な地下室が発見され、今ではワインの貯蔵庫として利用されたり、実験的なハウス・コンサートが開かれたり、ヘンツェが学生たちとのワークショップに使ったりしている。いつまでも夏の太陽がじりじりと照りつけようとも、この大昔の地下室はヘンツェの敷地全体の中で一番涼しい場所になっている。

ヘンツェが書斎からバルコニーに出れば、庭園と田園地帯を見渡すことができ、その風景ははるか遠くの濃い青色の水平線、すなわち地中海に至るまでずっと続いている。時には、古代エジプトの時代にすでに珍重されていた美しい鳥、ヤツガシラ(イタリア語でウプバ)そのものを見ることもできる。ヘンツェの日常はいうまでもなく彼の音楽の中にも、別世界からのメッセージやそれをもたらす使者たちが数多く存在している。そのような別世界とはいったい何で、どこにあるのだろうか? 芸術的な創造力あるいは架空の想像力が生み出す作り物なのだろうか、それとも、夏の熱気と歴史や神話で飽和状態になったこの地の景観が呼び起こしたものののだろうか? 私たちは今、今日のヨーロッパに現実にある現代のイタリアにいるのだろうか、それともギリシャ神話やアラビアのおとぎ話やローマ時代の伝説そして夏の蜃気楼に登場する人々が住む夢の世界なのだろうか?

なるほど、ヘンツェの音楽はこれらの有形無形の登場人物(およびジャンル)を利用して、それらの本質に対して私たちが抱く不確かさを弄んできた。ヘンツェの楽曲を聴いたりオペラの上演を観たりすると、私たちににとっては馴染み深いはずの現実と夢、常識と絵空事の間にある相違というものが、実はそれほど明確ではないのかもしれないという思いに捕らわれてしまう。『ルプパーヤツガシラと息子の愛の勝利』というヘンツェの作品全体が、このオペラの物語の中心的な語り

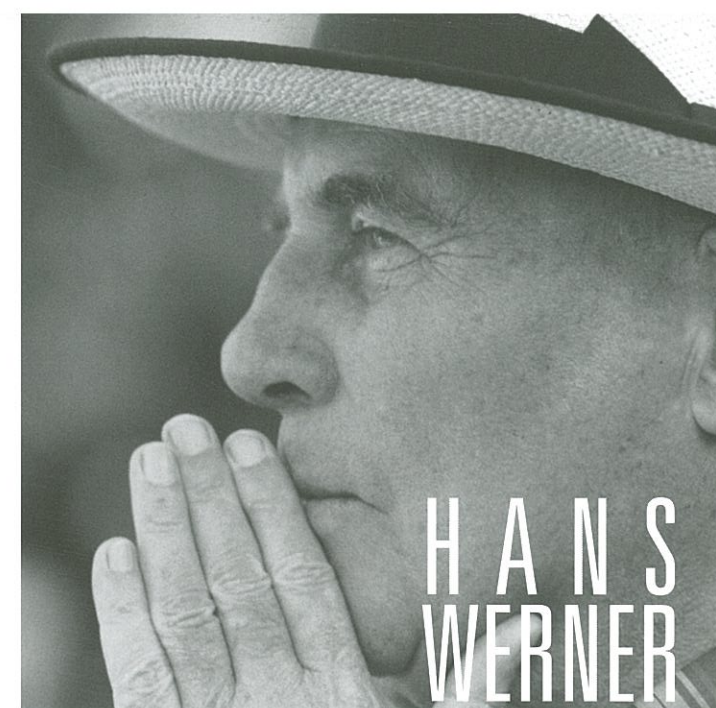
部である“老人”の夢で構成されている可能性はないだろうか? もしかしたら千夜一夜物語に出てくる夢の一つにすぎないのではないだろうか? だが、そうだとすれば、誰の夢ということになるのだろうか? 私たちに分るのは、この老人が悪い夢に苦しんでいるということだけだ。それなら、彼の見る夢の始まりと終わりを告げるのはいったい誰なのだろうか?

さらに、ヘンツェ自身も本物のヤツガシラが実生活でもやって来たことがあると言っていることから、この“老人”が見る悪い夢は観客に信じさせたいオペラの中の物語というより、ヘンツェ自身が見た悪い夢と もっと深い関わりがあるのかもしれない。つまり、ヘンツェの音楽と人生には、歴史と神話、悪夢と“真夏の夜の夢”が混じり合っているだけでなく、第二のもう一つ別の基盤が常に存在してきたことになる。すなわち、彼が根っからの芸術家であり、現実的で凝り性のプロダという点である。ヘンツェの音楽の多く——彼の人生の大半という人もいるが——には、まるで夢のような要素があるが、彼自身は自分が生きている現実を強く意識しながらも、労を惜しまず仕事に打ちこむ卓越した作曲家である。

1926年にドイツに生まれたヘンツェは、ナチ政権の統治下に成長期を過ごした。この頃経験した最初の心理的衝撃がその後の彼の全てを形作ることになる。ヘンツェはその体験に駆り立てられるように、社会に対する用心深さを養い、それが生涯続くことになる。さらに、彼を社会的にも政治的にも意識の高い芸術家へと変貌させ、反ファシズム、反軍国主義、そして自由を擁護する民主主義に深く傾倒した人道主義活動家にならしめたのである。こういったこともまた、ヘンツェの芸術上のエネルギーの一部になっている。この観点から見ると、夢見人とは対極にあるのがヘンツェであり、彼は常に物事の真っ只中において、ありとあらゆる混雑と混乱を抱えたローマという世界から離れたことは一度もない。

ヘンツェの音楽の中で、私たちは美と優雅さを秘めた音色に遭遇する。そこには夢と神話とおとぎ話と不思議がある。そこには今とは別の現実の幻影やもっと明るくて良い人生への夢がある。それと同時に、闘志や反抗心を表す強い感覚もあり、すべての権力、権威、抑圧に対する激しい怒りや激情が込められている。1976年にロイヤル・オペラによってロンドンで初演されたオペラ作品の『We come to the river (我々は川に来た)』のようなヘンツェの代表作(音楽的には最も複雑)の中には、今の現実に強く訴えるものがある。その一方で、『ルプパ』のような作品は、ずっとすんなりと彼の音楽にある夢のもつリアリティに私たちがいざなってくれるにちがいない。美しい庭園と神秘的な鳥が存在する世界に住みたいというヘンツェの願望が表せる形になっているこのオペラには、この世では不可能ではないにしても困難な愛が存在する(『ルプパ』に登場する恋人の一人はイスラム教徒で、その相手はユダヤ人である)。それは、引力を超越した音楽つまり無重力の音楽という彼の考えを表すものである。例えば『ルプパ』の最後の場面の昼から夜へと移り変わる「青い時間」に、空を舞う鳥にそれが象徴されている。それでいて、じっと耳を傾けると、ここでもまた、大都市の反響音が遠くから聞こえてくることに気づくのである。

2007年5月25日



©Schott Music

HANS WERNER HENZE

第549回定期演奏会

2007年10月20日(土) 6:00p.m.

サントリーホール

ヘンツェ:
オペラ【ルプパ】
ヤツガシラと息子の愛の勝利

(舞台演出演奏会形式、全2幕、字幕付、日本初演)

指揮=飯森範親

アル・カズム=ラウリ・ヴァサール(バリトン)

バディアト=森川栄子(ソプラノ)

デーモン=トム・アレン(テノール)

老人=松下雅人(バス)

アジブ=

ファブリス・ディ・ファルコ(カウンター・テナー)

ガリブ=ジェローム・ヴァルニエ(バリトン)

マリク=小川明子(メゾ・ソプラノ)

ディジャブ=小野和彦(バス)

ヴォーカル・アンサンブル=東京混声合唱団

舞台演出=飯塚勸生

SY10,000 AY8,000 BY6,000 CY5,000
発売中

平成19年度文化庁芸術創造活動重点支援事業

助成: アフィニス文化財団
財団法人ロームミュージックファンデーション
財団法人 花王 芸術・科学財団
東京都芸術文化発信事業
社団法人私的録音補償金管理協会 (Sarah)